

周作クラブ会報

(第39号)
2010年6月10日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

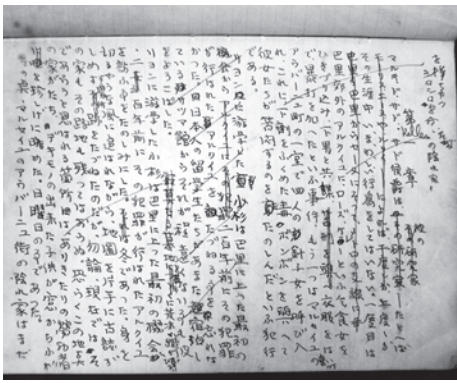
- | | |
|--------------|--------|
| 新企画展について | (1面) |
| 「原泉の旅」報告 | (2・3面) |
| 特別寄稿「まぼろしの人」 | (4面) |
| 「文学館便り」 | (5面) |
| 「狐狸庵の深い河を探る」 | (6・7面) |

今回のテーマは「遠藤周作と映画」

五月から第六回企画展はじまる

長崎市立・遠藤周作文学館（長崎市東出津町77）では、開館十周年を迎える今年、新たな企画展として「遠藤周作と映画——小説家になった映画少年——」を開催する。これまでも二年ごとに企画展示の変更を行ってきたが、六回目となる今回の企画展は5月22日から2012年5月まで。映画化された遠藤作品を中心に、映像と文学の関係が明かされる。なお、この新企画展では、先に発見された若き日の未発表小説「われら此處より遠きものへ」も特別展示される。

遠藤周作が少年時代から映画に魅入られていたことはよく知られている。「鞍馬天狗」の主演俳優・嵐寛寿郎に



「直筆の未発表草稿」写真提供／文学館

弟子入りを願い出る手紙を書いたり、大学卒業時には松竹の助監督試験も受けた。しかし希望はかなわず、結局は小説家への道を歩むが、その映画好きは終生変わることがなく、自分の芥川賞決定の日も池袋の映画館にいたし、晩年には映画学校（日活芸術学院）の校長を十年以上にわたってつとめてもいた。遠藤周作と映画のつながりはそれからでなく、フランス留学時には、映画の手法こそが小説づくりに役立つ——と結論づけて、とくにフランス、イタリア、チェコスロバキアの映画を精力的に観、伏線の張りかた等について考察している。グレアム・グリーン

画的手法を分析したのも、この頃である。いわば遠藤周作の文学は、映画によつて生まれたとも言えることが出来るのだが、それを考えると、のちに遠藤文学の多くが当然のように映画化されていったのも不思議ではない。

映画化された遠藤作品

遠藤没後、瀬戸内寂聴さんは、「遠藤さんは代表作のほとんどが映画化されていて、なんて幸せな人なんだろう」と語っているが、実際に映画になった遠藤作品は数多い。それを製作年代順に挙げてみると、



新企画展に集う周作クラブ会員
撮影 梅田和子さん

「真夜中の招待状」野村芳太郎監督（昭和56）
……原作「闇の呼ぶ声」

「海と毒薬」熊井啓監督（昭和61）
……原作「海と毒薬」

「深い河」熊井啓監督（平成7）
……原作「深い河」

「愛する」熊井啓監督（平成9）
……原作「わたしが棄てた・女」

となるが、すでに記者発表されたマーチン・スコセッシ監督によるハリウッド映画「沈黙」のクランク・インが遅れていて展示に間に合わなかったのは残念。

今回の企画展「遠藤周作と映画」では、映画化された作品のうち、主として「沈黙」「海と毒薬」「深い河」「わたしが棄てた・女」の4作品に焦点が当てられ、それぞれのテーマを通して遠藤文学の流れが理解できると同時に、原作と映画との違いも浮かび上がる。それでも展示内容は、「読む」ことより「見る」ことに主眼が置かれているから、何より楽しめる新企画展と言えるだろう。

また、遠藤周作には映画化された作品のほか、テレビドラマとなった作品（「女の一生」など）もあり、さらに演劇（「黄金の国」「薔薇の館」「メナム河の日本人」「王妃マリー・アントワネット」など）や、ミュージカル（「泣かないで」原作は「わたしが棄てた・女」）、オペラ（「沈黙」など舞台にのせられた作品も多いが、今回はこれらの情報も第二展示室で紹介される。

（周作クラブ幹事／加藤宗哉）